

写真はアンティーク・ジュエリーのひとつ、アンティーク・カメオである。このストーン・カメオ本体は18世紀に彫られ、金のフレームは19世紀に作られたものである。モチーフは古代ギリシアの女神アテナ（Athena）。アテナは知恵、芸術、そして戦術を司る。注目したいのは女神の兜。兜の天辺に彫られているのは竜である。一見すると蛇のようにも見える。西洋においては、竜も蛇もほとんど差異がない形で表現されてきたのである（アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』）。竜が兜に鎮座する形で添えられるのは、竜が戦争において、敵の軍勢に恐怖をもたらす存在であったから（ボルヘス+ゲレロ『幻獣辞典』）。また、dragonはもともと「はっきり見る」という意味のギリシア語に由来するから、知恵・芸術・戦術の神にふさわしいアトリビュートとも言えるだろう。だが同時に、西洋においては、竜がつねに邪悪なものと考えられてきたのも事実だ。ギリシア神話のヘラクレス、キリスト教の大天使ミカエル、イングランドの守護聖人・聖ジョージなど英雄が描かれるときは、必ずと言ってよいほど悪の化身である竜を踏みつけにしている。こうした畏怖すべき存在であると同時に、まがまがしさを表す竜が一番雄弁に語られるのは、英国の劇作家シェイクスピア（1564-1616）の『リア王』（1605-06?）においてである。リアは劇冒頭、怒りにまかせて忠臣ケントにこう叫ぶ——「竜と、その怒りの間に割り込むな！」（一幕一場123行）。リアは、王権を表す竜に自分をなぞらえて怒りを表現しているのであるが、はしなくも同時に、愛娘を勘当し王国を分裂させることになる、彼の愚かしさをも言い当ててしまっているのだ。

滝川睦 教授



アンティーク・カメオ 「アテナ」

『源氏物語』「初音」は、はじめて春を迎えた六条院の稀有なめでたさを語る巻です。六条院とは、太政大臣にまで至り栄華を極めた光源氏が建設した、四町（一町は120メートル四方）からなる豪邸です。新春の陽気あふれる、まさに極楽浄土のような華やかな御殿で、光源氏は新春を寿ぎ、妻紫の上との末長い将来を契るのでした。しかも今年の元旦は、ことさらめでたいとされる子の日に当たっていました。『源氏物語』随一の祝意に満ちたこの巻を、古典に通暁していた中世・近世の貴族たちは、正月に読むのを嘉例としていたそうです。

この六条院とは、ただの広大な豪邸ではありません。四つの町は、それぞれ春夏秋冬の四季を象徴するものとなっており、季節のイメージにふさわしい女君たちが住んでいます。古代中国の五行思想（色や季節、方角など、世の中のさまざまな事象を木火土金水の五元素から成り立つとする思想。たとえば木＝青＝春＝東）にもとづいた四方四季の邸です。この邸の主である光源氏には、時間を掌握する王者、といった趣きがあります。他に四方四季の邸の例として有名なのは、浦島伝承の龍宮城です。室町時代の御伽草子『浦島太郎』では、「東の戸を開けて見れば、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の音も軒近く」「西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、籬の内なる白菊や」などと龍宮城の四季折々の風情が語られています。さて、光源氏とかかわりの深い女君の一人に、明石の君という人物がいます。都の貴人と娘の結婚を切望する父の入道は、願いが叶わぬ場合は海に入ってしまう、と常に娘に厳命していました。その噂は都の源氏の耳にも入り、「海龍王の後になるべきいつき娘（箱入り娘）」と笑われます（若紫巻）。はからずも、やがて都を追放された源氏は明石へと流れ着き、この女君と深く関わることになるのでした。故郷を離れた浦島太郎が海底の龍宮で美女と出逢い、結婚するのとよく似ています。まさに六条院こそ龍宮城であり、明石の君を娶った、邸の主人光源氏は、海龍王なのでした。

大井田晴彦 教授



初音巻、元旦の六条院の春の町。光源氏と明石の姫君が明石の君からの手紙を読んでいる。庭では童女たちが小松引きに興じている。正月の初子の日の小松引きは、長寿を保つと考えられた。

初唐の駱賓王（らくひんのう）に「詠雪（雪を詠む）」という詩があります。

龍雲玉葉上  
鶴雪瑞花新  
影乱銅鳥吹  
光銷玉馬津  
含輝明素篆  
隱迹表祥輪  
幽蘭不可儷  
徒自繞陽春

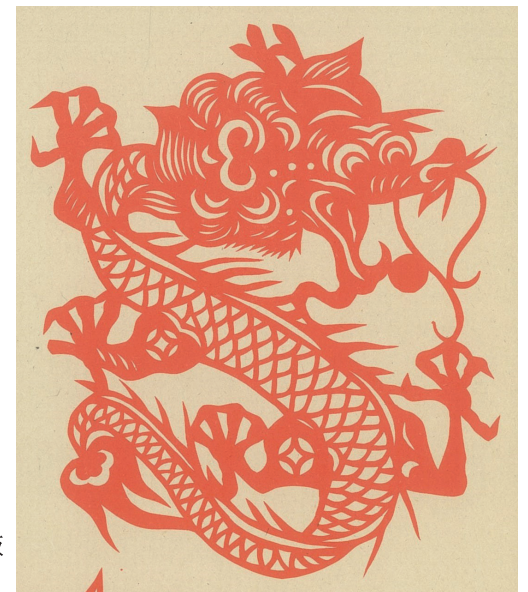
龍雲（りゅううん） 玉葉（ぎょくよう）の上  
鶴雪（かくせつ） 瑞花（ずいか）新（あら）たし  
影乱れて 銅鳥（どうう）吹き  
光（ひかり）銷（ち）りて 玉馬（ぎよくば）津（うるお）う  
輝（ひかり）を含んで 素篆（そてん）を明らかにし  
迹（あと）を隠して 祥輪（しょうりん）を表す  
幽蘭（ゆうらん）は儷（なら）ぶべからず  
徒（た）だ自（おの）ずから陽春を繞（まど）ふ

（龍のような雲が美しい葉の上を覆っている。鶴の羽のような雪が瑞々しい花のように広がっている。風に雪影がちらちらと、風見鶏がくるくると向きを変える。光が雲間を透過して、屋根の縁玉飾りがつややかに輝く。雪が光を反射して、地上の巻物に文字を浮かび上がらせ、つぎには書跡を消して祥瑞の兆しを描き出す。幽かにひっそりと咲く蘭も雪には半歩及ばず、ただただあるがままそのまま陽春をまどっている。）

空から舞い落ちる雪花を「龍雲玉葉」、地上に降りる雪を「鶴雪瑞花」と表現しているところ、漢字の国の人を羨ましく思います。古の人々は雪がどのようにして地上に落ちてくるのかを知らなかったでしょう。そして、雪が地上に積もるさまを不思議に思ったことでしょうか。けれども、このような八文字で雪を表すことができたのです。

この詩では最終句の「陽春」という言葉から、春節（旧暦の正月）に空から舞う雪が春の到来を言祝ぐような明るい陽光を感じます。みなさまにとって光に満ちた一年になりますように。

田村加代子 准教授



剪紙——旧暦正月に家に貼り福を願います（『剪紙芸術欣賞』中国電影出版社、1998）



# 月刊 名大文学部 第137号

隔月刊行



編集発行：  
名古屋大学文学部広報体制委員会  
koho@hum.nagoya-u.ac.jp  
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。  
2024年1月10日発行